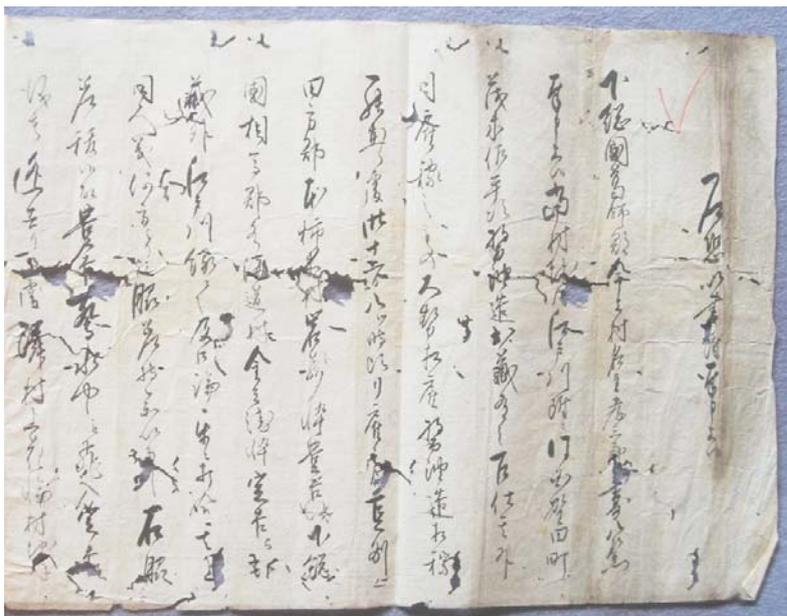


河岸に集まる人びと

(かしにあつまるひとびと)



今上村名主から代官
役所へ宛てた報告書
(郷土博物館所蔵
田中吉右衛門家文書)

これは安政5(1858)年6月14日に作成された、今上村の名主孝三郎ほか1名が村内で起きた事件について、代官役所に報告した史料です。事件の概要は次の通りです。野田町の茂木佐平次が今上村に持っていた醤油蔵(出蔵)では、多くの召仕や日雇稼(ひやといかせぎ)が働いていたのですが、日雇稼をしていた伊豆国本柿木村(いずのくにほんかきぎむら)(静岡県伊豆市)出身の豊吉が、下総国水海道村(しもうさのくにみつかいどうむら)(茨城県常総市)出身の定吉と江戸川べりで口論になりました。口論の理由は定かではありませんが、定吉が脇差を持ち出したために、驚いた豊吉が江戸川に飛び込み、行方不明になってしまいました。

江戸時代には、米をはじめとする多くの物資が、関東各地・東北地方から利根川・鬼怒川を航行する川舟を利用して大消費地の江戸に運ばれ、また逆に江戸からも、大量の物資が各地に送られています。こうした物資輸送のため、河川や湖沼に面した各地に、荷物を船に積み込み、あるいは荷揚げする「河岸(かし)」と呼ばれる港がありました。利根川と江戸川に挟まれた野田市にもいくつかの河岸があり、今上村の今上河岸もその一つです。江戸幕府は1770年代に関東地方全域で、河岸で荷物を船に積み込む河岸問屋を固定し、その河岸問屋から冥加金(みょうがきん)を徴収しはじめます。今上河岸でも河岸問屋が設定されますが、今上村の二人に加えて、野田町の二人、上花輪村の一人を加えた計五人で分割負担することを取り決めます。本来冥加金は、幕府から特権を与えられた河岸問屋が納めるものです。この負担方法からは、野田の醤油にとって今上河岸の舟運(しゅううん)がいかに重要であるかがわかるでしょう。

上掲史料の背景はよくわかりません。しかし、水海道は鬼怒川の重要な河岸で、舟運を通じた関係が推測されます。また、伊豆国から日雇稼に来る経緯も不明ですが、遠国からも人が集まる様子を見て取れます。『大日本物産圖會』に描かれているように醤油造りには多くの人手を必要としました。醤油と舟運が、今上河岸・村に多くの人を引き付けているのです。こうして集まった人びとは、喧嘩に脇差を持ち出すような、一面で荒っぽい民衆ですが、彼らによって、河岸に活気がもたらされたことも事実でしょう。

《詳しくは…》

* 吉田ゆり子 1997「下総国今上河岸と醤油の流通」『野田市史研究』第8号 野田市

* 大友一雄 2002「下総葛飾郡今上村 田中吉右衛門家文書目録」『野田市史研究』第13号 野田市

